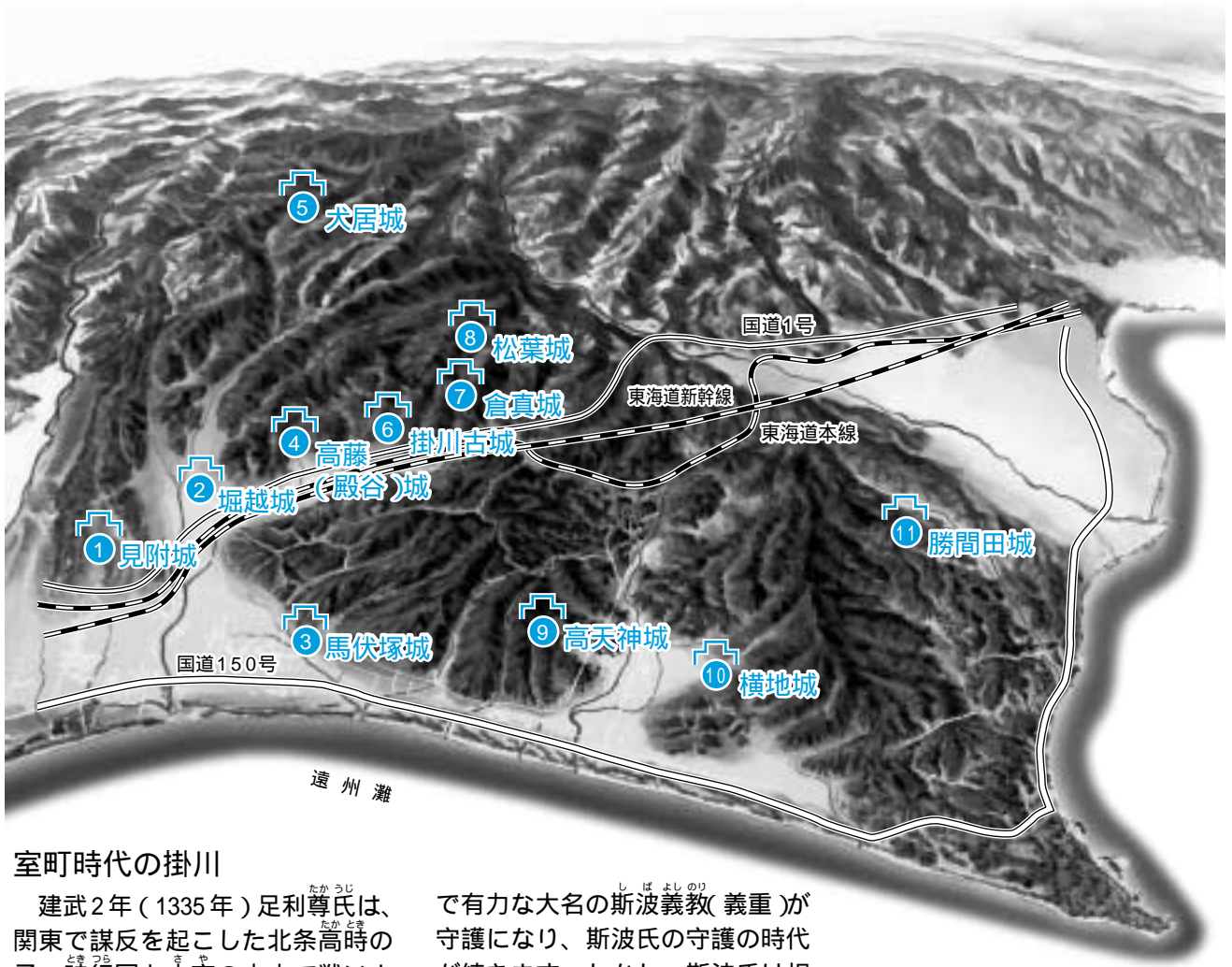


いつの時代も、天下を支配する将軍との関わりが深かった掛川

山内一豊までの掛川の武将たち — ②



室町時代の掛川

建武2年(1335年)足利尊氏は、関東で謀反を起こした北条高時の子、時行軍と小夜の中山で戦いました。この時、海老名(掛川市東山口)も戦場になりました。建武3年、足利尊氏は、新田義貞や楠木正成軍を湊川で破り、新しい武士の政府、室町幕府を始めます。足利氏の北朝と後醍醐天皇の南朝の二つの朝廷の時代です。

室町幕府は、足利尊氏に従って戦い手柄を立てた今川範国を、遠江の守護に任命します(1336年)。

室町期の守護は、裁判権や判決を執行する権限などを持ち、鎌倉期の守護に比べ大きな力を持っていました。見附(磐田市)に守護所が置かれます。その後、遠江の守護は1400年代の初めころまで、仁木氏、千葉氏、高氏と何人も交代し、応永12年(1405年)、足利氏の一族

で有力な大名の斯波義教(義重)が守護になり、斯波氏の守護の時代が続きます。しかし、斯波氏は相続をめぐる争いを起こし、この争いが斯波氏の勢力を衰えさせただけでなく、応仁の乱(1467年)の原因になりました。応仁の乱以後は、守護大名は振るわず、その家臣が大名となり領国を奪い合う、戦国の世となっていきます。遠江は、地頭職の小笠原氏や原氏、堀越氏、狩野氏、また、将軍直属の奉公衆である勝間田氏、横地氏などの地方武士が力をつけ、それぞれの領地を独自に支配する、国人領主が台頭します。原氏ほどの勢力はありませんが、川井氏、松浦氏などの武士も現れます。しかし、明応3年(1494年)、駿河国の守護大名である今川氏が、遠江に領地を確保するために攻めてきます。

もっと詳しく知りたい方は、中央図書館の特集コーナーへどうぞ

1490年ころまでの遠江の城と武士

- 見附城の狩野氏
- 堀越城の堀越氏
- 馬伏塚城と高天神城の小笠原氏
- 高藤(殿谷)城の原氏
- 犬居城の天野氏
- 掛川古城の朝比奈氏
- 倉真城の松浦氏
- 松葉城の川井氏
- 横地城の横地氏
- 勝間田城の勝間田氏

今は奈良の大峰山にある長福寺の釣鐘(国の重要文化財)

暦応元年(1338年)南朝の北畠顕家軍が京へ攻め入る途中、掛川と菊川の境あたりで略奪を行い、この時、本郷の長福寺の鐘が略奪されたという説もあります。

